

宮城県信用漁業協同組合連合会第五代会長

## 小山 亀吉

育み鍛えた男気と冷静で  
地域漁業を支える

【おやま かめきち】

- 
- 1925(大正14)年 気仙沼町(現気仙沼市)に生まれる
  - 1941(昭和16)年 家業の水産加工業に従事
  - 1968(昭和43)年 気仙沼漁業協同組合理事
  - 1969(昭和44)年 気仙沼冷凍水産加工業協同組合  
初代組合長
  - 1981(昭和56)年 気仙沼センター水産加工業  
協同組合組合長理事
  - 1984(昭和59)年 気仙沼漁協組合長
  - 1994(平成6)年 宮城県信用漁業協同組合連合会  
第五代会長
  - 2011(平成23)年 1月12日死去

## 男気と冷静を使い分けて

ピンク色のシャツがよく似合い、明るいベージュ色の外車に乗る洒落た人。愛妻家で、東京への出張によく奥さんをともなった。幼いころに母親を亡くし寂しい思いをしたので、同じ境遇の子どもには親身に世話を焼いた。

趣味も多彩だった。麻雀、カラオケ、日本舞踊を習い、黒田節が得意。またゴルフに至っては、「気仙沼でオレが一番に始めた」と豪語するほどのめりこんだ。

無論、酒席も好んだ。仕事の酒は相手がもう飲めないというまでつきあい、心を開き語り合えば事はうまく運ぶ、といった。気仙沼漁業協同組合の組合長になってからは長身でスマートな体型もだいぶ貫禄がついたが、それは付き合い酒もおいしく飲めた代償だったか。それでは続かないとタバコをやめ、健康にも気を配るバランス感覚の持ち主。

義理堅く、情にもろい。相手の事情を斟酌し、損は承知で男気を見せるが、その一方で人の心を見抜き交渉する駆け引きの上手さもあつた。また間に立つ場合は一方に肩入れせず、つねに公平を旨とした。利害がぶつかるなら双方の意見を聞き、冷静な判断を下した。結果、多くの人望を集めた。男気と冷静。それが小山亀吉の原動力だった。

小山家と漁業の関わりは明治の末に父、亀一郎が水産加工と海運を手がけたことに

始まり、のちに魚問屋を兼ねるようになる。気仙沼の魚問屋の特徴は、魚の売買だけでなく海産物の加工も手がけたことで、夏のカツオ節、冬のちくわ製造が主力だった。大正一五年発行の町勢を紹介する冊子では、竹輪蒲鉾製造業の欄に「金メー海産物製造場」小山亀一郎の名前がある。ちくわ製造は、明治に始められたサメ漁から発展し、大正の半ばには全国一の生産量を誇る気仙沼の名物になる。海運業から身を起こした亀一郎は、亀吉が生まれるころにはその第一人者になっていた。

また金メー（以下カネシメイチ）はほかの魚問屋同様に、漁業者への融資もしていた。魚問屋の融資事業は加工業より前に成立し、融資は船の建造、修理や資材提供などの現物給付に依った。返済には魚の売り上げが充てられたが、重要なのは、貸し手である魚問屋と借り手の漁業者の信頼関係である。当時の魚問屋について個々が現在の漁協のような役割を担っていたというが、いわば魚問屋は資本家であり港町のキーマンであった。

昭和に入るとカネシメイチはさらに事業を広げ、加工業のほかに船の仕込みや船宿を兼ねるようになった。動力船の登場で、遠く四国や紀州の船がやってくるようになったからで、長い漁のために船具や食料を整え、船乗りたちに宿を与えた。風呂を沸かし、酒席を用意し、洗濯も引き受ける。ケガや具合の悪いものがあれば病院も世話した。

亀吉は、船乗りたちのために世話を焼く家族や町の人々に触れながら育った。のち

の男気と冷静の根っこには、漁業を支え、港の世話役として働く家業の風景があったのだ。

## ホームグラウンドをつくる

一九五五（昭和三〇）年、カネシメイチは冷凍冷蔵業を始める。このとき、小山は三〇歳。弟ともに家業を仕切り、隆盛とともにその名は広く知られるようになっていた。この翌年には気仙沼魚市場が完成、昭和三三年からは一二年に渡ってサンマの水揚げ量日本一を記録するなど、サンマは港町の高度成長を象徴した。しかしサンマは足の早い魚で、遠くまで流通させるには鮮度を保つことが重要だった。小山はそこに着目し、冷凍サンマなどで新しい事業を起こしたのだ。

このころの小山は、自ら「やんちゃだった」と語ったようによく遊んだ。メグロ製のバイクにまたがり塩竈の浦霞コースへゴルフに出かけたが、仲間には魚問屋の後継ぎたちがいた。昭和四四年、小山は気仙沼冷凍水産加工業協同組合（以下冷加工）を設立、初代組合長になるが、彼らはその設立メンバーにもなった。同じ稼業、同じ時代に育った者同士は馬が合った。小山は冷加工設立後、生涯組合長を退くことなく、周りも誰一人辞めさせる気もなかったというほどそこはホームグラウンドといえる場だったが、愛着には仲間の存在があったのだ。

小山が冷加工を設立した背景には遠洋漁業の活況がある。インド洋から大西洋、そして北洋へと遠洋漁船が版図を拡大した昭和三八年、カネシメイチはカツオ一本釣りで漁船経営に乗り出した。しばらく大漁が続いたが、当時の気仙沼魚市場は規模は十分だったものの豊富な水揚げに應える冷凍設備が不足していた。そのため静岡の焼津や清水に水揚げせざるを得ず豊漁の喜びも半減した。北転船のスケソウダラも好調だったが、多くは石巻や塩竈に水揚げしていた。

漁船漁業は花ざかり、しかし気仙沼は役不足で水揚げできない。そんな事情が冷加工を立ち上げた理由だった。

冷加工では共同の冷凍設備と一次加工場を持ち、遠洋漁業者の受け皿となることとした。また融資事業や組合員の経営安定と相互扶助のための活動も行なうとした。目標は単純明快、「漁協に負けない組合にしよう」で、それを言ったのはもちろん、小山である。理屈やへつらうことを嫌った彼らしい言葉は、分かりやすく、仲間を結束させる力強さを持っていた。

## 親分肌の気概で大規模漁協を率いる

漁船経営の好調と冷加工の立ち上げなど、小山を躍進させた風は、漁業全体のものでもあった。

しかし昭和四八年のオイルショックを契機に風向きは大きく変わる。燃料や資材が高騰する一方で魚は売れず価格は低迷、さらに二〇〇海里問題が漁業を逆風にさらした。

もちろん小山も例外ではいらなかった。本業では漁船の不振を加工業でカバーしたが業績は振るわず、昭和五九年五月に気仙沼漁協の組合長になってからは、地域漁業全体についても考えなければならなかったので心労も重なった。

そもそも気仙沼漁協は、日本有数の水揚げを誇る魚市場を運営するため地域漁協とはいえ規模は他を圧倒し、さまざまな業者が会員に名を連ねた。関わるものと取扱量、金額が大きくなれば利害がぶつかり、結果、それを束ねる組合長には相応の力量が求められた。度胸と腕力を恃みに己の意思を押し通そうとする猛者を諫めながら、ほかの要望を聞き、公平な判断で議論を収束させる。組合長には親分肌の気概が求められたが、かつての魚問屋の風景を根っこに持つ小山にとっては、たやすい仕事だったかもしれない。そして、経験を重ねるごとに、兼ね備えていた能力を磨いていった。

気仙沼漁協の組合長になったのと前後して小山は団体の理事や役員を務めることが多くなったが、仕事の基盤は漁協においた。毎朝九時に出勤し、夕方まで組合員とともに働いた。出かけることも多かったが、自席か会議室、あるいは応接室にその姿があった。当時職員は一二〇名を超えていたが、小山は全員の様子と性格まで把握していたという。

もちろん厳しさもあった。職員にミスがあれば人前でも注意した。しかし長く引きずることはなかった。怒ると怖いが笑顔もひとときわ印象的だった。冗談も飛ばした。冷加工で口にした目標は「漁協に負けない組合にしよう」だが、漁協職員によく言ったのは「石巻や塩竈に負けるな」だった。ここでもまた単純明快。分かりやすい目標を与え、職員のやる気と結束力を高めるのが小山のやり方だった。

## 感情を抑え、ただ目的のために

小山が宮城県信用漁業協同組合連合会（以下信漁連）の理事に就いたのは、一九九一（平成三）年で、三年後には会長になった。

信漁連は漁協の信用事業を手がけ、県内の地区漁協などを会員に構成された。「浜の金融機関」といわれるように、直接的な取引は沿岸漁業者や小規模な漁業経営者であることが多く、会長は会員漁協の組合長が務めるのが慣例だった。

一方、小山は気仙沼漁協の組合長ではあったが、大型漁船と加工業の経営者である。慣例通りなら小山より会長にふさわしい人もいただろう。冷加工と信漁連のつながりは事業の隆盛とともに結びつきを強くしていたが、慣例から外れるのは画期的なことではなかったか。しかし会員たちは総意をもって小山を会長に選んだ。見方を変えれば、小山の人望が広く漁業者に知られていたということでもある。

とはいえ金融事業は専門性が高く、素人が簡単に把握できるものではない。しかも時代はバブル崩壊を経て、金融ビッグバンが始まろうとするときに混迷を深めていた。その認識は小山にもあり、専門的なことは専務理事以下に任せ、自分は大所から事業をコントロールするようにした。

オレががんばりすぎると、下の者がやりづらくなるからほどほどにする。そんなふうにも言ったように、小山は冷静な判断を謙遜で包むセンスも持ち合わせていた。

信漁連の会長になって間もなく、県内の漁協で負債による経営危機が表面化した。そうした問題は以前にもあったが、負債額が桁違いだった。原因は昭和四〇年代に発生した会員の大型倒産と貸付金や購入未収金など、固定化した債権の整理で累積欠損金を抱えてしまったためだが、好不調の波がある養殖で挽回しようとしたことが傷口を大きくした。数字上ではもはや存続できない状態だったが、放置することは養殖と沿岸漁業で暮らす地域漁民を見殺しにすることである。世間では自己責任の言葉が聞かれたころだが、それを漁民に問うのは酷だった。

「漁協系統一体となって支えよう」

それは支援を決めた運営検討委員会の総意だったが、小山は信漁連会長として特に熱く支援を訴えた。そして再建のために漁協系統団体と行政により支援基金を創設し、運用利息を支援に回すこととした。

この問題に直面したとき、小山は何を思ったか。長く小山を支えた人は「予断や感



情を排除し、ひたすら目的のために働いたのではないか」と言う。

積年の負債を見過ごした責任を問う気持ちや、あるいは漁民がかわいそうといった情に流されることなく、まっすぐに課題を見つめ、最も合理的な方法で解決に取り組む。この場合なら、漁協を救うことだけを考え進む。つねに公正公平であった小山ならそうしただろうと思える。

## 港町のキーマンとして記憶に生きる

金融も手がけた魚問屋稼業に育ち、その六〇年後に「浜の金融機関」のトップになった。その縁について本人は特段気にすることもなかったが、家業の風景は信漁連の仕事を支えていたはずだ。

小山は長い経歴において、さまざまな立場に身を置いた。幼いころに船員の苦労を間近にし、後年はその経営者になった。魚問屋としては魚を卸す側に、加工業者としては買う側になった。金融では貸し手と借り手になった。相対する両方の立場を経験したがゆえに、小山は対立し揺れる人の心を理解できたのだ。彼に備わった公平さ、男気と冷静を使い分けるバランス感覚はそこに由来しているのだろうか。

平成一四年、小山は気仙沼漁協の会長を退き、翌年には信漁連会長を退いた。それから八年が過ぎた平成二三年、年が明けて間もなく小山は突然この世を去った。冷加

工の新年会で昔なじみのメンバーに囲まれ、飲んで、食べて、笑い過ごしたすぐあとのことだった。

老いたとはいえきびきびした所作や口ぶりは相変わらずだったので、突然の別れをたくさんの人が惜しんだ。

小山が亡くなって間もなく気仙沼は、東日本大震災の津波と火災で壊滅的な被害を受けた。そこで小山を思い出し、あの津波を見ていたら死ぬに死に切れなかったろうから、見ずに逝ったのも考えようでは幸いだったかもしれない、と言う人がいる。一方で、あの人なら被災もバネにふたたび立ち上がっただろうと言う人もいる。そんな会話にわずかにやりきれなさを残しつつ、港町のキーマンは、いまでも多くの人々の記憶に生きている。享年八七歳だった。